
さようなら...パパ、ママ。

ラヴェンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さようなら…パパ、ママ。

【Nコード】

N0285BA

【作者名】

ラヴェンダー

【あらすじ】

トップモデルの母、優しくて頼もしい父——。
優しいボーイフレンドとの初恋。

少女さくらは何不自由なく育ち、幸せに暮らしていた。

だが、彼女はいつも暗い予感を抱いて生きている。

いつか、とても恐ろしいことがわたしたちを襲うのではないかと…
…。

そしてある日、彼女の愛してやまない父が事故で死んでしまう。
その死によって、さくらの家族はゆっくりと崩壊していく。

やがて、彼女は伯母の家に預けられることになったが……。

く薄幸の少女に降りかかる過酷な運命。

彼女が強い女性となっていく成長を描くダーク・ファンタジー＆ロ
マンスです！

1、プロローグ、予感

こんなに幸せでいいのだろうか――、と思うときがある。

それは決まって、不幸な人々を目の当たりにするときだ。

わたしだって悩みの一つや二つ、コンプレックスだってある。

けれど、本当に不幸な人たちに比べると、

わたしのちっぽけな悩みなど比にもならないのだろう。

わたしは近辺で、最も裕福な家に生まれついた。

生まれたときから、わたしに足りないものなんてなかったのかも
れない

――いいえ、足りなかったのはむしろ不幸だと言えた。

なぜなら、美しくて気高くてギリシャ神話にでてくる女神のような
母と、

優しくて紳士的で、頼もしい父をもっているということ。

お家はとっても広いし、わたしが大好きなドールが幾体も飾られて
いる。

どの人形もガラスの目に美しい巻き毛、愛らしい顔立ちをしていて、
言葉にできないほど高価であるのを物語っているのだ。

――しかし、いくら贅沢な暮らしをして好き勝手に生きていて
も、

わたしはいつも暗い罪悪感を抱いていた。

こうして何不自由ない生活を送っている間も、世界のどこかの誰かが自分の不幸を嘆いているかもしれないのだ。

わたしが聞くだけでゾツとするような恐ろしい不幸に見舞われて――。

飢えに苦しむ子どもたちや、戦争やテロで子供を失い、がつくりと首をうなだれている母親たちの写真、パンの一切れを家族で分け合い、

ろうそく一本を最後のかけらにいたるまで大切にする、
貧しい人々の暮らしの様子を聞かされたりすると、それがいつでも重くわたしを覆う。

どんなに頭上が輝かしく晴れていたとしても、どんなに幸せを噛みしめているときでも、

灰色の雲がどこからともなくやってきて太陽を隠してしまうのだ。
なぜ彼らが貧しく、わたしが裕福で気ままな暮らしをおくれるのだろうか。

神様は、どうしてわたしをちつとも苦しめようとしなのかな……。

――それはわたしの中に眠る永遠の謎であり、
じわじわと広がる恐怖でもあった。

わたしは、つねに暗い予感を背中に感じながら生きてきた。
まさに、崖に囲まれたきらびやかな花畑を歩いているような少女時代を送ってきたのだ……。

いつか足を踏み外して、崖から落ちる日がくるのだと……。

——やがて……それは的中することになる。

運命は、ある日突然わたしを、安全で幸せなちいさな花畑から、下へと突き落としたのだった。

さながら千の沈黙を引き連れた、

慈悲なき死に神のように——……。

2、母

母はロシア人ハーフのトップモデル。

背が高く、スタイル抜群でブルーの美しい目をしたとびきりの美人だ。

近所の人によれば「モデルか女優になるために生まれてきた女性」なのだという。

ほんとうにそうだと思う。

どんなにプライドの高い女性でも、母を目にすれば抱いていた自信をこてんぱんにされてしまうだろう。

そして男性は、ダークブルーの大きな瞳で見つめられるだけで夢のような感覚に陥る。

母はわたしの誇りだ。

きっと、オードリー・ヘップバーンやグレース・ケリーの娘になったらこんな気分なのかもしれない。

しかし、母は高慢じゃない。

容姿が良い人ほど心が汚かったりする。

けれど、母は容姿におとらず心のきれいな人だった。

誰にでも思いやりを忘れない。忙しい人だけでも、決して愚痴をこぼさない芯の強い人でもある。

正しいことは正しいと信じて、間違っていることを即座に見分けることのできる目の鋭さだってある。

まさに母はすべての人にとって理想の人。
自分になりたいと思う事柄を絵に描いたような人なのだ。

——彼女は、神様の愛を一身に受ける女性なのかもしれない。

そうわたしと言ったことがあるが、驚くべきことに母は小さく微笑んで、かぶりを振ったのだ。

「そんなことはないわ」（いつもながらその微笑みにはうつとりとした。）

「私は生まれつきこんな素晴らしい環境にいたわけじゃないのよ。ロシア人の母はあまり日本語が上手じゃなくて、苦労も多かったの。とくに、父が母とトラブルを起こして家を出てしまったからはね…。けれど母と父は駆け落ちしてまで日本に来たから、とても故郷に帰るわけにはいかなかった……。

だからこそ私はモデルの仕事を選んだのだけだ」

母は悲しそうに目をふせ、続けた。

「私はスカウトされたわけじゃなくて、母を助けるためならと、必死にオーディションを受けたのよ。

実を言うとな、わたしは教師になりたかったの。子供が好きだったから。でもすぐにあきらめたわ」

3、父

彼女はきつぱりとした口調で言った。

「そのころは家にろくな美容品もなかったから、周りの女の子たちみたいに美しく着飾ることはできなかった。それでもようやく私はモデルとなって、今は素敵な人と可愛い娘をもって素晴らしい日々をおくっている…。

でも、それはかつての苦渋と忍耐があつたからある幸せなの。

本当の神の愛娘は、私じゃなくてあなたなのよ。

きつとね」

母はにつこりと笑った。

——そのときの衝撃は今でも忘れられない。

おかしなわたしは、心のどこかで母が生まれたときから大金持ちのモデルだと

思っていたのかもしれない。

この世に生を受けたときから、もうすでに父がそばにいて、瞬く間に大人になって結婚する……。

不幸などという言葉なんて知らない夢の国のお姫様のように。

だがそれは甘くて愚かしい妄想に過ぎないのだ。

わたしは母の味わった苦しみや辛さをかけらも知らないのだろう。

……本当の神の愛娘は、わたしなのかしら。

もしそうなら、わたしは一生苦勞を知らずに過ごすのだろうか。

いいえ、苦勞をしないことが幸せだと断言できるかしら…。
だって、甘やかされて悩みの一つもない人間なんて、
なんだか薄っぺらくて意味のない存在に思えるもの。

「ただいま、さくら」

「おかえりなさい、パパ」

父はコートをぬぎながらいつもの明るい微笑を浮かべた。

「元気にしていたかい」

「ええ。楽しかったわ。クラスでね……」

わたしがクラスの班対抗レクについて話し出すと、父はコートをハンガーにかけたり、

靴をぬいだりしながら聞き入った。わたしは自分の思いがけない活躍をしゃべりながら、

いつも優しげにきらめく父の目を見つめた。

父は百八十センチ、痩せていても太っていてもいない体格をしている。

とっても若々しくて、エレガントな人だ。とても四十代には見えない。

そして誰もが知る大手航空会社の副社長。頭が良く、なんでも知っていてとても頼りになる人である。どうして学者にならなかったのだろうか、本気で疑問に思うときがあるくらいだ。

そして……、わたしの一番の理解者でもあった。

「それはすごい」父はうなずきながら笑った。

「僕のサクラのことだから、なんでもできるんだな」

「スポーツは苦手なんだけど」

「そりゃあまあ、おまえは頭がいいからな。そっちのほうに向いているかもしれないな」

「……それでね…将来はさ……」

すると、ダイニングルームの扉から母が首を出した。「あら」

「おかえりも言わずになにをはなしているの」

「やあ、ユリア。今日はめずらしく早いんだね」

母はわざとつつけんどんに答えた。「ちがうわ」

「あなたが“めずらしく”帰ってくる日だから。はやめに仕事を切り上げたの。Kuraraの撮影もあつたけど明日に変更させてもらったんだから」——kuraraは人気ファッション雑誌の一つだ。

「それはすまない」けれど父は満面に微笑を広げた。

わたしと父がダイニングルームに入ると、家政婦の吉川さんがキッチンから顔を上げて暖かく微笑む。

「…旦那さま、おかえりなさい。今日は特別なディナーですよ。なんでも、旦那さまの誕生日ですからね」

わたしはそこで、わざと玄関で言わないでおいだ言葉を最大限の笑

顔とともに告げた。

「パパ、47歳の誕生日おめでとう。いつもありがとう」

わたしが父に抱きつくと、父は手をまわしてくれた。父の手は、いっただって温かい。

「ありがとう。お前は本当にいい子だね。両親が忙しくても、ちっともわがママをいわないから」

わたしが照れてうつむくと、母が背後にやってきてわたしの肩に手をおいた。

母の優美な腕からは華々しいライラックの香りがする。

「プレゼントを部屋においておいたから。あとで見て感想を聞かせてね。さあ、早く着替えて、夕食にしましょう。さもないと、さくらのお腹と背中がくっついてしまうわ」

母は魅力的な声で笑い、わたしの肩を軽くたたいた。父も笑いながら階段を上っていく。

わたしは頬をふくらませて席についた。

右手で銀のフォークをにぎって。

実のところ、吉川さんが腕によりをかけた料理の匂いに、とても耐えられそうもなかったのだ。

そしてわたしたちは、何ヶ月かぶりで、家族そろって食事をとった。それがどれだけ素晴らしいかなんて、きっと誰も想像がつかないだろう。

4、ボーイフレンド

けれど、素晴らしいのは家ばかりじゃない。

学校でも、わたしは気ままに楽しい時間を過ごした。

わたしの学校生活に新たな彩りを加えたのは、やはり清二の存在だろう。

彼は同じ高校一年生。

ボーイフレンドでもある。

容姿端麗、成績優秀の彼はすらつとして背も高い人気者。

彼はいつもにこやかな微笑を浮かべて、他人に優しく、そんな彼の周りにはいつも自然と人が集まっている。まさに人目をひく存在だ。

わたしたちが知り合うきっかけになったのは、放課後の図書室のことだった。

社会のレポートを終わっていないかったわたしは放課後、図書室に残って最後の総仕上げをしていた。

そのとき、図書室の扉が開き、誰かがわたしを見て声を上げたのだ。

「あつ、ヤッベー。人いるじゃん」

くるくるの天パーがわたしを見るとすぐに引っ込んだ。

「ほんと？ いつもこの時間はいないんだけど」

そういつて中をうかがおうとしたのが、あの深見清二。

視線がしばらく部屋を泳ぎ、明るげな色をしたその目がわたしをとらえたとき、

わずかに見開かれたのがわかった。

わたしはレポートをかきあつめて、あわてて席を立とうとする。「あ、ごめん。図書委員会でしょ？」

彼らはおかしそうに笑みを浮かべると首を振った。

「ちげーよ、俺の補習に清二がつき合ってくれるだけ」

天然パーマの男子がいうと、清二はうなずき、わたしを見つめたままかすかに微笑んだ。「…レポートだろ？ その向こうの席つかつてもいいかな。邪魔にならない程度で」

「あ、うん。いいよ」ふいに体が熱くなり、清二の目を見ていられなくなった。

わたしはレポートとペンケースを再び置くと、はやく終わらせるために没頭しようとした。

向こうの席に向かいながらも、深見清二の視線が自分を離れていないのがわかったからだ。

二人はそれから、数学やら英語やらの教科書を取り出して先生と生徒になって補習を始めた。

教えている清二の横顔を見てしまったら、女の子は一撃かもしれな

い。
レポートをかきながら、わたしは彼の説明のわかりやすさに感心し

ていた。

天パーの男子は問題をすらすらと解けるようになるとうれしそうに笑い声を上げ、わたしが終わって、すぐに終了したようだった。

5、清二

「邪魔じゃなかった？ 篤志がうるさかったろ」

篤志というらしい天然パーマの男子は塾で、補習が終わってすぐに走って帰ってしまったらしい。

わたしと深見清二は帰り道が同じということで、成り行きで帰路をともにしていた。

改めて近くで見ると、深見清二は最初見たときよりもかっこいい。風になびいて横に流れる髪の毛が軽くウェーブしていて、とてもさわやかだった。

彼は首をかしげてバカみたいに見入っているわたしを見た。「……??？」

「あつ、い、いや。ぜんぜん」あわてて我に返る。

「そうか。あのレポートほんとうにめんどくさいよなあ。六ページ以上なんてさ」

「もう提出したの？」

「うん。昨日」

透き通ったテノールで答え、彼は微笑を浮かべた。

「あ……そういえば僕のこと知ってるっけ」

「ええ、深見くんていうんでしょ」

「そっだよ」うなずいた。「意外と知られてるんだな」

「当たり前でしょ」

「どうして」

「言えるわけがあるだろうか？？」

わたしは顔を真っ赤にして前を向いた。彼が戸惑ったような顔をしたのが、視界の隅で見えた。とんだ恥をかいてしまったようだ。

「そっちだって、なんでわたしのこと知ってるの」

「篤志がよく話してるよ」彼が笑った。

「図書室に入ったとき、あいつがうれしそうにしてるのわかっただろ？」

「わからなかった」名前さえも知らなかった。

「クラスじゃ有名だよ。でも、想像してたよりお高くとまってないんだね」

「もちろん。お高くとまったことなんて一度だってないもの」

「そっみたいだね。篤志にも希望はあるのかも。」

じゃあ、また。あそこ曲がれば家だから」

「あ、そうなの」希望??

彼はかすかに微笑んでからいった。

「レポート頑張れ」

わたしがうなずくと、彼はすぐに角を曲がっていった。

わたしはしばらく身体が中に浮くような気分になり、あやうくよるめいて倒れるところだった。

自分の頬をつねり、夢じゃないことを確かめてみる。

うれしい夢を見ると、目覚めてしまったとき、がっくりしてしまう……。

でも、これは夢じゃない。

なんたって、あの深見清二と帰ったのだ！
誰が信じてくれるだろう？

5、清二（後書き）

書き貯めておいたので、今は更新早いです。
そそっかしくてすみません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0285ba/>

さようなら...パパ、ママ。

2012年1月1日22時53分発行